

シュシ・スライマン

《国家 (Negara)》



シュシ・スライマン (1973-)
《国家 (Negara)》

2012-2013年
アクリリック他・綿布
183.0 × 244.0cm
平成27年度購入

© Shooshie Sulaiman

日

本では明治以降一五〇年近くの間、欧米から積極的に美術を学び、それに照らし合わせて自らの表現を發展させてきました。こうした歴史を反映し、MOMATでも開館以来六十年以上、主に日本と欧米の作品を収集してきました。でも考えてみればこれはおかしなことでもまるで日本と欧米しか世界に美術は存在しない、と言わんばかりだからです。しかし、特にこの二十年で状況は大きく変わりました。グローバル化は加速し、欧米以外のさまざまな国や地域の美術との関係が無視して日本の美術が成り立つことはもはやありません。とりわけ、経済發展と相次ぐ大型美術館の開館で状況を呈するアジア地域の美術は、身近にあって共に刺激を与えあう存在です。MOMATも遅いスタートながらこれから少しずつ多様な地域の作品を収集し、「日本と欧米」という考え方の枠を広げたいと思っています。シュシ・スライマンの収蔵はその第一歩です。

スライマン（一九七三）はマレーシアのアーティストです。絵画、ドローイング、インスタレーションなどさまざまな方法を用いて彼女が取り上げるのは、自らのアイデンティティのこと、そしてマレーシア社会のことです。マレーシアは、マレー系、中国系、インド系の主に三つの民族で成り立つ多民族国家です。スライマン自身は中国系の母とマレー人の父との間に生

まれ、二つの民族のはざままで生きてきました。しかも両親を早くに亡くし、自らのルーツに一層の不安定さを感じています。

《国家 (Negara)》は、悲劇的な事件で亡くなった父をめぐる一連の作品、(Sulaiman Ithi Malayu (スライマンはマレー人だ/だった)に含まれるものです。(Sulaiman Ithi Malayu)では、ドローイングやテキストに加え、生家を模した大型インスタレーションが制作され、また父の残したゴム園の木と樹液を用いて父の顔のレリーフを作るプロジェクトが行われました。もう一つのアプローチが国旗をパッチワークするいくつかの作品です。《国家 (Negara)》では、二〇〇八年の総選挙で使われた多数の政党の旗を含む布の切れ端を縫い合わせて一つの面が作られ、その上に男性の顔が描かれています。スライマンの作品に頻繁に登場するこれらの男性たちは、異なる民族に属するようにも、互によく似ているようにも、また父の面影を反映しているようにも見えます。

スライマンにとって、個人のアイデンティティの問題はマレーシアという国家の問題と密接につながっています。スライマンの作品は、「自分は一体何者なのか」という普遍的な問いによって私たちとつながっていると同時に、マレーシアで生きる、という、私たちの知らない経験を垣間見させてもくれるのです。

(企画課長 蔵屋美香)